

水 泥 新 聞

第二八号
2017年(平成29年)4月5日



編集

フジクリン工業株式会社

〒四六四・八六二三

愛知県名古屋千種区今池

四丁目1番4号

TEL

〇五二・七三三・〇三二五

熊本地震から約1年 仮設住宅で 活躍する浄化槽



©2010 熊本県くまモン# K25988

2016年4月14日21時26分。熊本を最大震度7の地震が襲った。その28時間後の4月16日1時25分には、再び最大震度7の揺れに襲われる。未曾有の災害に見舞われた熊本で、仮設住宅の汚水処理事情を探った。



▲益城町のテクノ仮設団地に設置された浄化槽(CSL II-50型×20基、CSL II-45型×8基)

想定を 大幅に上回る 家屋の倒壊

熊本地震から約1年。震災の傷跡が残る県内で、人々の日常を支える重要な役割を果たしたのが仮設住宅だ。熊本県危機管理防災課の発表(※1)によると、熊本地震による住家被害状況は、全壊が8、652棟、半壊が33、242棟、一部破損が143、612棟と甚大な被害をもたらした。



▲益城町のテクノ仮設団地

人々の日常を支える 仮設住宅の完成

仮設住宅の1棟目が完成したのは、地震発生から約1か月半が経過した頃。現在は、16市町村に110団地4、303戸(※2)の仮設住宅が完成している。

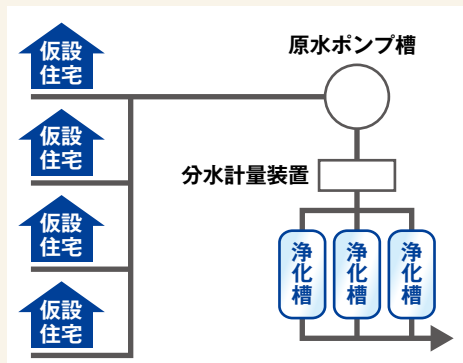
東日本大震災を踏まえ 中型浄化槽を導入

仮設住宅は原則2年で撤去されるため、汚水処理設備として欠かせないのが浄化槽だ。熊本では、環境省が東日本大震災の経験を踏まえ発表した指針(※3)により、大型浄化槽ではなく中型浄化槽を複数基設置することとなっ

コラム

浄化槽を複数基設置する理由

仮設住宅では、住民の転入や転出が頻繁にあるため、浄化槽に流入する汚水量が一定しないことが多々ある。浄化槽を効率的に運用するためには、流入汚水量を安定させることが重要。そのため、生産スピードが比較的早い中型浄化槽を複数基設置し、流入汚水量に応じて稼働基数を調整する分配方式が適している。



▲分水計量装置から分配される汚水量で、稼働基数を管理する。



▲仮設住宅の建設がスタートした頃の現場(城南地区)

た。これは、入居者の出入りに伴い増減する流入汚水量に対応するため。熊本市にある営業所も被害を受けたフジクリンでは、全国のスタッフが丸となり製造体制を整え、全体の5割近くのにのぼる浄化槽を納入。被災した人々の生活に大きく貢献した。

※1/2017年3月7日発表
※2/2016年11月14日熊本県発表
※3/応急仮設住宅に設置される浄化槽の施工・維持管理・有効利用における留意点

被災地を知る
フジクリーン社員が
当時を振り返る

くまもと
がんばるモン

フジクリーン社員が

くまもと
がんばるモン

熊本営業所所長の声



▲震災後、資料が散乱する熊本営業所内

4月14日、自宅の駐車場で聞いたことのない音の後に、ものすごい揺れに襲われまし

た。家族と避難した後、震源地が益城町と聞き、さらに凍りつきました。当営業所に益城町から通う社員がいたからです。すぐに連絡を取り、本人の無事を確かめると、そのまま営業所に行き、被災状況を確認。翌日は、営業所の片付けに終始しました。4月16日の本震では、この世の終わ



熊本営業所 所長 松永一

りかと思うほどの恐怖に襲われたのが今でも忘れられません。頻繁に大きな余震が続くため、1週間ほど車中泊が続きました。電気は幸い使用できましたが、水道は1か月近く止まったまま。この時は、水の大切さが身に染みました。しかし、落ち込んでばかりはいられません。浄化槽メーカーの社員として、被災地復興に協力すべく、忙しい日々が始まります。本社、福岡支店の協力を得て、仮設住宅の浄化槽設置に全力で取り組ませていただきました。

今回の経験では、全国のボランティアの方々からたくさん

現在、営業所の全スタッフは、熊本で元気に頑張っています。

本社技術担当者の声

本社に応援要請があり、人手不足の仮設住宅の建設現場に駆けつけました。現地では「本当に終わるのか」と不安で一杯になりましたが、被災しながらも前向きに頑張る現地スタッフに逆に励まされました。皆で力をあわせて必死に頑張ったお陰で、事故なく現場の作業を終えることができました。



技術管理部

ました。今
度は笑顔の
熊本に遊び
に行きたい
です。

飯塚工場主任の
声

仮設住宅に設置する浄化槽は、いつも以上に高い品質とスピードが求められます。飯塚工場の職員全員が一丸となって「震災で大切なものを



飯塚工場

主任 白水正剛

さまの想いに
応えられ
たのではな
いかと思っ
ています。

コラム

環境省が「熊本地震浄化槽被害状況調査」を実施

熊本地震から約4か月後の昨年8月、環境省から委託を受けた公益社団法人熊本県浄化槽協会が、浄化槽の被害状況を調査した。



▲
浄化槽周辺の
地割れ・陥没



■調査の目的

被害状況を迅速に把握し、復旧の体制を確立するため。さらには、浄化槽の信頼性を高め、浄化槽の普及を促進するため。

■調査対象

震度 6 弱以上を記録した活断層沿いの 8 市町村を対象に、788 基の浄化槽の被害状況を調査。

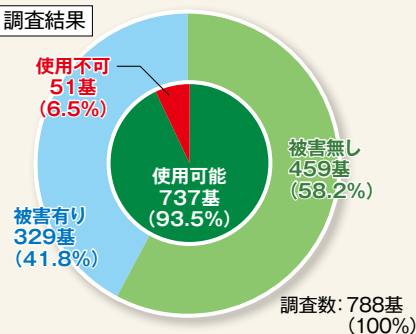
■調査方法

対象地域で浄化槽の維持管理を行っている
協会会員の協力のもと、現地調査及び必要
に応じて書類による調査を実施。

■調査の結果

788 基のうち、41.8%にあたる 329 基が被害を受けていた。その中で、使用不可の浄化槽は 6.5%にあたる 51 基。その 51 基を除く 278 基については被害が軽微であり、災害後も生活環境を維持する必要性から使用可とされた。

調査結果



■今後の課題

未修復の 51 基に関しては、漏水など公共用水域等への影響も懸念されることから、迅速な復旧が望まれる。

■考察

多数の家屋が全損壊し、電気や水道などのインフラも大きな被害を受けたが、浄化槽においては6.5%にあたる51基が使用不可になるにとどまった。残りの93.5%の浄化槽においては、これまで通り生活排水を処理し重要な役割を果たした。